



日本のクラシック界発展へ奔走

クラシック音楽の世界三大コンクールの一つが「ショパン国際ピアノ・コンクール」。現在、第19回がポーランド・ワルシャワで開かれている。反田恭平は2021年の前回(第18回)、日本人過去最高の2位に入った。これまでの歩みや11月に大分市であるリサイタルについて、気鋭のピアニストを直撃した。



第18回「ショパン国際ピアノ・コンクール」で日本人過去最高の2位に入ったピアニスト反田恭平

そりた・きょうへい 1994年、東京都出身。チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院、ショパン国立音楽大などで学んだ。妻は第18回ショパン国際ピアノ・コンクールで4位に入賞したピアニスト小林愛実。

強制されることなく音楽を始めたという反田。ピアノは指揮者になりたくて極めようとし、ピアニストの定義を追い求めるうちにコンクールを意識するようになった。

迎えた前回のショパン国際ピアノ・コンクール。世界の才能豊かな若手たちとのぎを削り、1970年の内田光子さん以来の快挙を成し遂げた。

当時を振り返り、「出場後に初めて、もつとうまくなりたと思った。没入してたくさん弾いて、いろんな人に注目され、自分の音楽で人が変わるんだと実感できた。今となつては2位でよかった。1位だったらもうやめていたかも」と明かす。

現在はピアニストとしての肩書のほかに、指揮者としての活動やオーケストラの設立と幅広く活躍する。音楽祭やアカデミーの立ち上げも検討しており、日本のクラシック界発展のために奔走している。

大分市のリサイタルでは、ブラームス「ピアノ」の11のコーラル前奏曲OP. 122

凝縮された時間と空間

来月、大分市で
リサイタル

より第8番『一輪のバラが咲いて』、ブラームス「ピアノ・ソナタ第3番へ短調OP. 5」、ショパン「四つのスケルツォ」を演奏する。

いずれも思い入れのある作曲家の好きな曲。ハートモもコード進行も全てにおいて「エモさ」があるブラームスに対し、ショパンは独特の歌い回しやリズムなど唯一無二の存在だという。

大分のファンに向け、「大分は家族との温泉旅行や、サイン会をした思い出がある。幼い時から弾いてきた作品も踏まえ、なじみのない人もクライマックスにはすてきな結末が待っているはず。凝縮された時間と空間に浸ってほしい」と話している。

(三上奈穂子)

反田のインタビュ要旨は大分合同新聞プレミアムオンライン「Gate(ゲート)」に掲載しています。



Gate「文欄」のQRコード

リサイタルは11月21日午後6時45分から、大分市のいちごコラシシアターで。チケットは完売。



〔問①〕 反田恭平さんは2021年の「ショパン国際ピアノ・コンクール」で入賞しましたが、日本人として過去最高となった順位は何位ですか。

〔問②〕 反田さんはコンクールで「今となっては2位でよかった」と話していますが、そのように思ったのはなぜですか。

〔問③〕 反田さんは、ピアニストのほかに、どんな活動をしていますか。

〔問④〕 あなたが好きな作曲家や、曲、楽器を調べて分かったことを紹介してみましょう。